

『文選』における「美」

橘 英範

はじめに

本プロジェクト研究会に参加するようになってから、報告者が常々気になっていたのは、日本でいう美しさや中国でいう美しさが異なっているであろうということだった。文化や時代によって美しさの基準が異なっていることは、女性美の例を持ち出すまでもなく明らかであろう。

中国で美しいと感じられたものは、いかなるものであったのか。今回、その点について調査を試みることにした。もちろん、美しいと思われたものは極めて広範にわたると思われる、報告者の力量と守備範囲をはるかに超えるものであるから、以下のように範囲を絞ることにした。

まず、調査対象として、六朝の梁代に編纂された詞華集『文選』を選んだ。その主な理由は、日本文学に多大な影響を与えたとされていること、周から梁に至る約千年間の詩・賦・文章が収められており、梁以前の状況を全体的に把握するのに適していると思われること、注釈書・翻訳・索引等が完備されていて調査に適していることなどである。

『文選』は全六十巻の大部のもので、『文選』中の文学作品に描写される事物の多くは、美しいからという理由で取り挙げられているから、さらに、『文選』の中で「美」の文字を用いて表現されているものに絞ることとした。具体的な方法としては、斯波六郎博士編『文選索引』^①および台湾中央研究院漢籍電子文獻サイト^②によつて「美」の文字の例を全て抽出し、前後の文章から、いかなるものが「美」と表現されているかを判断し、分析することとした。

今回は、その報告の一部として、調査結果の簡単な概要と、自然や風景について「美」と表現されている例の考察を中心に取り挙げることにしたい。これには、紙幅の関係等といった消極的理由もあるが、積極的な理由もある。例えば、他の国でしばしば文学に描かれる海の風景が中国文学に

おいては暗黒の場所とされほとんど描かれないという指摘がなされことがあるが^③、『文選』においても、やはり中国文学に特徴的な自然美・風景美が詠じられていると思われる。さらに、『文選』所収の作品の中心となっている六朝前期は、山水画が成立したとされる時期でもあり^④、単に文学だけでなく、美術とも関連する可能性があると思われる。

なお、管見の及んだ限りでは、同様の調査報告に関する先行文献はないようであるが、特に美学の方面については知識が乏しいこともあり、あるいは見落としがあるかもしれない。諸賢のご教示を願う次第である。

1. 「美」字について

報告に入る前に、「美」字の字義と用法について簡単に触れておきたい。よく知られているように、許慎の『説文解字』羊部においては、「美は、甘なり。羊・大に从ふ(美、甘也。从羊・大)」との説解が施されており、「美」は「羊」と「大」の会意文字で、肥えた大きな羊を表し、段玉裁の注に「羊大なれば則ち肥美なり(羊大則肥美)」というように、大きな羊の肉が美味であることが本義であるとされる。現在の漢和辞典にも、これを襲うものがしばしば見受けられるようだ。

これに対し、白川静博士『字通』^⑤によれば、「大」は羊の後ろ足を含む下体の形であり、神に捧げる犠牲としての羊をほめることばであつて、日常食膳のことをいうのではないという。

白川氏の解釈は、甲骨文や金文等の出土資料による最新の文字研究を踏まえたものであつて、正鵠を射ていると思われるが、『文選』の収録作品の作者たちにとっては、恐らく『説文解字』の解釈の方が一般的であつたろう^⑥。

この「美」の文字は、一般的な形容詞としての用いられる他に、「ほめ

る・よみす」等の意味の動詞として用いられる場合や、「よく」という副詞として用いられる場合、「うつくしき・ピ」という名詞として用いられる場合もあって、『文選』中にもそれぞれ例があり、特に動詞・名詞の例はかなり多いようだ。

ただ、例えば動詞として用いられる場合でも、その事物を「美」であると考えてほめるのであろうから、全てを調査の対象とすることにした。

2. 『文選』における「美」字

続いて、『文選』における「美」字の用いられ方の概要に触れておこう。

前述の方法で調査してみると、『文選』本文中には全192例の「美」の文字が見えるようである。そのうち3例は梁の昭明太子の序文における用例であるが、前掲『文選索引』にならってこれをも含めることとする。

一通り調査を終えて気付いた点を次に記しておく。

まず、用例が最も多いのは、美德・美行・美点などという時の「美」、すなわち立派である・すぐれているといった意味の例のようで、解釈に揺れがあるものもあるため正確な数値は提示できないが、恐らく三分の二程度はこの意味で用いられているだろう。これは、人間の事跡や行為・人格・性質などに関するものであり、ある思考活動を経た上で「美」であると判断するものである。よい表現が思いつかないが、論理的・思索的・観念的な用いられ方とでも呼ぶことができようか。用例としては10例に満たないが、文学作品の表現・描写について「美」と表現するものも、この論理的・思索的・観念的な表現の一つといえよう。

用例が次に多いのは、容貌が美しいという意味の用例である。女性の美貌をいう表現がほとんどだが、時に男性の容貌についても用いられる。これは、対象となる人物の容貌を見て（すなわち、容貌についての場合は、視覚による表現といえるだろう）、理屈抜きに「美」であると感ずるものといえよう。上の論理的・思索的・観念的な表現に対して、感覚的・直観的な表現であるといえようか。ただ、容貌に関する表現の場合、実際の用例においては、時に人格や性質をも含んでいる可能性があり、思索的・観念的な例と厳密に分かつのは難しいようだ。また、用例によっては、後に触れるように、解釈が分かれるものもある。

視覚に関する表現では、後に本稿で中心に取り挙げる風景・自然に関するもの他に、物質・器物に関する表現もある。ただし、種類は少なく、「美」の文字で表現される物質は2種類に集約できる。すなわち玉および玉製品と衣服である。このうち、玉および玉製品については、徳の比喻として用いられることがあり、単純に視覚的表現とはいえない例もある。そのほか、『説文解字』で本義とされる味覚に関する表現は5例に満たず、聴覚に関する表現も5例ほどしかないようだ。嗅覚・触覚に関しては用例が見えないようである。

前掲『文選索引』は、2例以上見える熟語については、個別に項目を立てて用例を集めているが、それを手がかりに、以上のことを確かめておこう。『文選索引』が熟語として独立させているのものを用例の多い順に並べると、以下の通りとなる。

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| ○美人 (18例) | ○美談 (8例) | ○美者 (5例) |
| ○美玉 (4例) | ○美悪 (4例) | ○信美 (4例) |
| ○淑美 (3例) | ○美女 (2例) | ○美目 (2例) |
| ○美色 (2例) | ○美政 (2例) | ○美酒 (2例) |
| ○美新 (2例) | ○美聲 (2例) | ○美麗 (2例) |

以上の15語全62例である。残る130例が、単独で用いられたもの、1例のみの熟語、およびことばの並びとしては2例以上あるが、『文選索引』において熟語と認定されなかったものということになる。

さて、まず、用例が最も多い「美人」であるが、これは、美德・美行・美点に関するもの、すなわち論理的・思索的・観念的な例と、容貌の美に関するもの、すなわち感覚的・直観的な例との二種類に分かれるようである。これは、『楚辭』の中で用いられる「美人」が、漢の王逸の注以来、立派な人・有徳の人物の比喻と解釈されていることと関わるのであろう。『文選』中の例でも、容貌の美しい女性の意と有徳の人物の意の両方があり、さらに、どちらの意味でも解せるものや解釈の分かれるもの、表面上は女性のことを詠じているが、暗に有徳の人物を指す可能性があるものもあって、截然と分類することは難しいようだ。

登城望郊句 城に登りて 郊甸を望み
 遊目歴朝寺 目を遊ばしめて 朝寺を歴たり

小國寡民務 小國 民の務め寡く
 終日寂無事 終日 寂として事無し

白水過庭激 白水 庭に過りて激しく
 綠槐夾門植 綠 槐 門を夾みて植つ

城壁に登って、郊外を望み見たり、あちこち眺めながら、色々の役所を見渡したりする。小さな県だから、人民を治める任務も少なく、一日穏やかで、これといった仕事もない。澄んだ川の水が、音を立てて役所の庭を流れて行き、緑の槐の木が役所の門の両側に並んでいる。

直前の二句の風景は、役所の庭に流れる急流の白さと役所の門をはさんで並んでいる槐の緑を対比させた風景であり、川・庭園・樹木・建築物の織りなす風景美を表現したものの。変化に富んだ庭園美といったところか。

前の部分をも考慮すれば、郊外の風景(郊甸)と役所の建物(朝寺)が風景の中に加わり、さらには理想的な地方の小県であるために仕事が少ない穏やかな日々であるという、心の安閑も「美」の中に含まれることになるうか。

③宋・謝靈運(385-433)「述祖德詩二首」其二(卷一九)

遺情捨塵物 情を遺れて 塵物を捨て

貞觀丘壑美 丘壑の美を貞觀せり

常の心をうち忘れ、この世の俗事をも捨て去って、丘や谷間の麗しさを、真つ直ぐに見て楽しんだ。

ここでは直接には「丘壑」＝丘と谷間とを承けており、隱遁生活の場としての山と谷が「美」ととらえられている。その具体的な風景は、前の二句で描写されている。

隨山疏濬潭 山に隨ひて 濬潭を疏し
 傍巖藝粉梓 巖に傍ひて 粉梓を藝ふたり

山に沿いつつ、深い池を掘り開き、いわおの傍らに、白粉や梓の材(棺桶の材料。終焉の志を表す)をも植えた。

以上の四句には、丘・谷間・山・池・岩・植物が描かれている。さまざまなもの詠じられているほか、注目されるのは、池が穿たれ、終焉の志を表す表現とはいえ植林が行われていることである。すなわち、この丘と谷には人工的に手が加えられている。

④同前「從斤竹澗越嶺溪行」(卷二二)

情用賞爲美 情は賞を用て美と爲すも

事味竟誰辨 事味くして 竟に誰か辨ぜん

觀此遺物慮 此を觀て 物慮を遺れ

一悟得所遣 一たび悟りて 遣る所を得たり

この「美」はやや問題の残るもの。集英社全釈漢文大系^⑤では「思えば楽しみというものは、心にかなうことが一番だ。がしかし、分かりにくいことだから、だれがいったい明かしえられよう」と訳し、美を「よい」「すぐれている」の意味で解しているようである。

ただ、例えば森野繁夫博士^⑥が「さて、我が賞心になつたものこそが美なるものであるが、この道理は奥が深いので、結局は誰にもわからないだろう」と訳されるように、現在の謝靈運研究においては、この「美」は自然美・風景美の意味であり、謝靈運にとつて非常に重要な意味を持つ術語の一つとされるのが一般的のようである。ここでは、こちらの意味で解釈しておくこととする。

後の部分にいう「觀此」は、一般に目の前の山水と解されていることからすると、美と表現されているのはこの詩の前半部分ということになる。

猿鳴誠知曙 猿鳴きて 誠に曙を知れども
 谷幽光未顯 谷幽くして 光未だ顯かならず
 巖下雲方合 巖下 雲方に合し
 花上露猶泫 花上 露猶ほ泫る

逶迤傍隈隩 逶迤として 隈隩に傍ひ

若遽陟陁峴 若遽として 陁峴を陟る

過澗既厲急 澗を過ぎて 既に急なるを厲り

登棧亦陵緬 棧に登りて 亦た緬かなるを陵ゆ

川渚屢逕復 川渚 屢々逕復し

乘流翫迴轉 流れに乗りて 迴轉を翫ぶ

蘋萍泛沈深 蘋萍 沈深に泛び

菰蒲冒清淺 菰蒲 清淺を冒ふ

企石挹飛泉 石に企ちて 飛泉を挹み

攀林擿葉卷 林を攀ちて 葉の卷けるを擿む

猿が鳴いて、確かに夜が明けたことは分かるが、谷が深いので、朝の光はまだ差してこない。巖の下あたりで、今、雲が合わさり始め、花の上には、まだ朝露が滴っている。うねうねと谷川のくまに沿って進み、はるばると山の切れたところや小高い峰を越える。谷川を渡る時は裾をからげて早瀬を渡ったり、架け橋に登っては遙かな道をわたって行く。川のみぎわは、流れたり逆流したりしており、舟が流れにのったまま回転するのを楽しむ。蘋や萍は川の深みに浮かんでおり、菰や蒲は水辺の辺りを覆っている。石の上につま先立って滝の水を飲んだり、林の木に手をかけて、巻いたままの若葉を摘んだりしてみる。

これは詩題にいうように、谷から入って山を越えて再び川を下るという動きについて描写されており、ここで詠じられた景色は、変化に富んだ流れの川と遠く続く続く峰を中心にして、猿の声・朝日・谷・岩・雲・花・露・棧橋・水草・滝・林などのさまざまなものが詠じられた景色といえよう。

⑤ 同前「擬魏太子鄴中集詩序」（卷三〇）

建安末、余時在鄴宮、朝遊夕讌、究歡愉之極。天下良辰・美景・賞心・樂事、四者難并。

建安の末、余時に鄴宮に在り。朝に遊び夕べに讌し、歡愉の極を究む。天下の良辰・美景・賞心・樂事、四者并せ難し。

建安年間（196〜219）の末、私は鄴の都の宮殿にいた。朝には出遊し、暮れにはうたげを開き、この上ない楽しみを味わい尽くした。本来、この世において、良辰・美景・賞心・樂事の四つのことを兼ね備えるのは、難しいことである。

「良辰」とはよい時、めでたい御代の意、「美景」は美しい景色の意。「賞心」は気の合う友人、「樂事」とは楽しいこと、心樂しませる遊び。この作品は、謝靈運が魏の文帝曹丕の『鄴中集』にならって作った詩の序文である。『鄴中集』は現在伝わらないが、謝靈運は曹丕および周辺の七人の文人（七）の立場から擬作の詩を作っており、もとの『鄴中集』にもこれらの文人が作った詩が収められていたと思われる。この序文も曹丕の立場にたって作られており、建安の末に文人たちと宴会と出遊の楽しみを尽くしたことを回想する内容となっている。

その中で「美景」の語が用いられており、彼らが宴会・出遊の折りに目にした風景を「美」と表現していると思われる。風景美を表すことばであり、本稿の調査において重要な意味を持つことばであるが、それがいかなる風景かということになると、八人の詩人に成り代わって作った詩の中で描写される風景を見る必要がある。ところが、それぞれの詩を見ると、自らの人生行路を詠じた後、宴席に侍ることができ喜びを詠じるというパターンがほとんどで、風景の描写はほとんどなされていない。そのパターンが唯一用いられていないのが第八首の「平原侯植」（曹植）で、この詩には出遊の描写があるので、その部分を挙げておく。

| | |
|-------|---------------|
| 朝遊登鳳閣 | 朝に遊でて 鳳閣に登り |
| 日暮集華沼 | 日暮れて 華沼に集る |
| 傾柯引弱枝 | 柯を傾けて 弱枝を引き |
| 攀條摘蕙草 | 條を攀ちて 蕙草を摘む |
| 徙移窮騁望 | 徙移して 騁望を窮め |
| 目極盡所討 | 目極めて 討ぬる所を盡くす |
| 西顧太行山 | 西のかた 太行の山を顧み |
| 北眺邯鄲道 | 北のかた 邯鄲の道を眺む |

平衢修且直 平衢 修且直く
白楊信曇裏 白楊 信に曇裏たり

朝に出かけて皇宮に参内し、日が暮れると華やかな池のほとりに遊ぶ。枝をたわめて柳の柔らかい枝を折ったり、小枝に手をかけて香り草を摘んだりしてみる。ぶらぶら歩き回って心行くまで眺めやり、目が届く限り、はるかな景色を見はるかす。険しい太行山脈を西の方に顧み、邯鄲へと続く街道を北の方に眺めやる。街中の平らな大通りが、長く真つ直ぐに伸びており、白楊がまことになよやかに揺れている。

風景描写といえるのは、特にこの引用部分末尾の四句であろう。西方の太行山脈、北方の邯鄲へ続く道、街中の平たい大通り、そこに立ち並ぶ白楊の街路樹が描写されている。遠景の山脈と郊外の街道、近景の町・大通り・街路樹が構成している風景である。

⑥宋・鮑照（412〜466）「學劉公幹體」（卷三二）

茲辰自爲美 茲の辰は 自つから美を爲すも
當避豔陽年 當に 豔陽の年を避くべし

この冬のさなかであれば、雪はそれなりに美しいが、華やかな春の季節には、それを避けねばなるまい。

この作品は、雪を自らに喩えて詠じたもので、寓意を含んではいるが、表面上は風に舞う雪を「美」と呼ぶ例といえよう。これも前の部分の雪の描写を承けている。

胡風吹朔雪 胡風 朔雪を吹き
千里度龍山 千里 龍山を度る
集君瑤臺裏 君が瑤臺の裏に集り
飛舞兩楹前 飛舞す 兩楹の前

異民族の地で起こった風が、北の果ての雪を吹き上げ、千里の距離を旅して、北の竜山を越えてやって来た。玉で作られたみかどの楼台の中に入り込み、二つの柱のある玉座の前で待っている。

雪を「美」と表現した、他には見られない例である。北方から山を越えて玉で作られた天子の楼台に至り、天子の玉座の前で舞う姿が詠じられており、山・玉の楼台・玉座などと同時に詠じられることによって、雪の美しさが強調されている。

⑦齊・謝朓（464〜499）「直中書省」（卷三〇）

信美非吾室 信に美なるも 吾が室に非ざれば
中園思偃仰 中園にて 偃仰せんことを思ふ

誠に美しいが、私の住まいではないのだから、ふるさとの庭園の中で気ままに暮らしたいと思う。

これも②と同じく、①王粲「登樓賦」を踏まえた表現である。ただし、①②が広々とした景色を詠じていたのに対し、宿直をした中書省から見える宮中の庭という、限定された風景を描いている。具体的には、詩の前半十句（特に八句）に描かれた景である。

| | |
|-------|-------------|
| 紫殿肅陰陰 | 紫殿 肅として陰陰たり |
| 彤庭赫弘敞 | 彤庭 赫として弘敞なり |
| 風動萬年枝 | 風は 萬年の枝を動かし |
| 日華承露掌 | 日は 承露の掌に華し |
| 玲瓏結綺錢 | 玲瓏として 綺錢結び |
| 深沈映朱網 | 深沈として 朱網映ず |
| 紅藥當階翻 | 紅藥 階に當りて翻れ |
| 蒼苔依砌上 | 蒼苔 砌に依りて上る |
| 茲言翔鳳池 | 茲に言 鳳池に翔れば |
| 鳴珮多清響 | 鳴珮 清響多し |

天子の宮殿は静かで奥深く、そのあけ塗りの庭は、輝かしく広々としている。縁起のよい万年樹の枝を、そよぐ風が揺り動かし、めでたい承露のさらに、日差しが華やかに照らしている。連錢模様の窓は透き通って作られており、朱塗りの網模様の戸はくつきりと照り映えてい

る。赤い芍薬が、階段の辺りに咲き乱れ、青々とした苔が、石畳に沿って広がっている。この中書省で、鳳凰池のほとりを歩いてみると、珮玉は清らかな音を盛んに響かせる。

宮殿とその庭の風景で、風にそよぐ植物・日差しを浴びる塑像・窓・戸・花・階段・苔・石畳・池などが描かれている。すなわち、宮中のさまざまな自然物と人工物が織りなす美しさ・めでたさが「美」と表現されているといえようか。

⑧ 梁・沈約（441～513）「鍾山詩應西陽王教」（卷二二）

即事既多美 事に即きて 既に美多く
臨眺殊復奇 臨眺して 殊に復た奇なり
山中の事物に、美しいものが多い上に、山の外を眺め降ろすと、さらにみごとである。

全五章からなる詩の第三章の冒頭。この「事に即く」は、前の第二章で詠じた山中の景色であり、「臨眺」はこの直後に述べる遠方の風景であると解釈されている。すなわち、「美」という表現は、次に引く第二章を承けている。

| | | |
|-------|--------|----------|
| 發地多奇嶺 | 地より發りて | 奇嶺多く |
| 千雲非一狀 | 雲を干して | 一狀に非ず |
| 合沓共隱天 | 合沓として | 共に天を隠し |
| 參差互相望 | 參差として | 互ひに相望む |
| 鬱律構丹巘 | 鬱律として | 丹巘を構へ |
| 峻嶒起青嶂 | 峻嶒として | 青嶂を起す |
| 勢隨九疑高 | 勢ひは | 九疑に隨ひて高く |
| 氣與三山壯 | 氣は | 三山と與に壯なり |

大地より突き上がって、珍しい峰々が並び立ち、雲の中に分け入る様子、さまざま形状をしている。重なり合いながら、峰々が天を隠し、高く低く入り交じって、お互いに向き合っている。険しくうねり

ながら、赤い地層の崖を作り、重なり聳えながら、青いただきを立てている。その勢いは九疑山のように高く、その気は海中の三仙山のように盛んである。

「非一狀」の表現が端的に表しているように、この風景の「美」は、山の見せるさまざまな表情、起伏と変化に富んだ地形によるものである。すなわち、高さも形状も異なるたくさんの山々が幾重にも重なり合った連峰を描写しており、その山の様子をそのままことばに置き換えたかのように、さまざまな表現を駆使し連ねて山を表現している。

⑨ 梁・任昉（460～508）「齊竟陵文宣王行狀」（卷六〇）

其卉木之奇、泉石之美、公所製山居四時序、言之已詳。
其の卉木の奇、泉石の美は、公の製する所の山居四時序、之を言ひて已に詳かなり。

（竟陵王の邸宅の）草や木の珍しさ、池泉や庭石の美しさは、竟陵王が作られた「山居四時序」に詳しく述べられている。

竟陵王の邸宅の庭の「泉石」について「美」と述べたもので、庭に配置された自然物についてという例。庭園美の表現といえよう。竟陵王の「山居四時序」は残っておらず、具体的にはどのような美であったのかはよく分からないが、「泉石」の語から、池泉が設けられ庭石が据えられた、美しい庭が想像される。

以上が『文選』の中で自然や風景を「美」と表現した例であるが、最後に、気付いた点をまとめておこう。

まず、時代的な点でいえば、魏の王粲の①の例が最も古く、すなわち、『文選』中の先秦・兩漢の作品においては、自然や風景を「美」と表現した例がないことが分かる。このことは、文体の問題とも関わっており、先秦・兩漢にも盛んに作られた賦や文における例は少なく（賦は①の1例のみ、文は⑤⑨の2例）、魏晋以降に盛んになった詩の中に、多くの例が見られるのである。

これは単に、詩は一般に賦や文に比べると短篇であるから、一言で端的に風景を表現できる「美」という文字が用いられやすいためとも考えられるが、あるいは、当時の文人たちにとって、詩は自然や風景の「美」を表現するのにふさわしい文体と感じられていたのかもしれない。

次に、作者の点では、③④⑤の3例の用例がある謝靈運が注目される。

彼は、複数の例がある唯一の詩人であるばかりでなく、⑤では「美景」という、風景美の面から見て重要な熟語も用いている。六朝期の代表的山水詩人であり、その文学において「美」が重要な術語とされている謝靈運であるが、そのことは『文選』における「美」字の用例の調査によっても裏付けられるといえよう。

最後に、詠じられた自然・風景について気付いた点を挙げれば、次の二つの点が挙げられるだろうか。

まず第一に、複雑なもの・変化に富んだものが描かれる傾向にあるという点である。どこまでも続く緑の草原と雲一つない青い空、といったシンプルな景色は描かれず、最初の①からそうであるように、多くは、山があり川があり畑があり野原があり、岩が聳え草が生え木が茂る、といった風景を描いているようである。わずか二字にすぎない⑨の例でも「泉石」という二つのものが詠じられているし（この二字によつて、池が青い水をたたえ周りに庭石が点在する、興趣に満ちた庭園が想像されよう）、④や⑤に見るように、視点の移動によつて、さまざまな景物が描かれることもある。

変化に富んだものを描こうとする態度は、限定された題材を詠じた⑥（雪）や⑧（山）の例によく現れている。⑥の雪の例についていえば、一か所にしんと雪が降り積もる様子を描くのではなく、はるか北方の風や山、宮中の建物や玉座と組み合わせて描かれる。⑧の山の方も、例えば富士山のように形のよい山が一つどしりと聳えているという姿ではなく、切り立ち、うねり、重なり合い、向かい合うといった、複雑な様相が描かれるのである。

次に、第二の特徴としては、人工物や加工された自然が排除されない傾向にあるということが挙げられよう。全く手つかずの自然を詠じていると感じられる例は山を詠じた⑧くらいであり、その他の例はいずれも、道や

町並み・耕作地・架け橋や楼台などが、風景の中にとけ込んでいる様子が描かれている。すなわち、人間の営みと自然の調和が詠じられているといえようか^⑩。

③の例などは、隠遁生活を描く部分であるから、自然のままに暮らしている描写してもよさそうであるが、そこに描写されるのは、造成された池や植樹された木である。また、⑦や⑨の例では、庭園という、人間によつて作られた風景が「美」と表現されているのである。

以上、『文選』において、特に自然や風景を「美」と表現した例を見てきた。自然と人間の営みが調和した、変化に富んだ風景美という『文選』に描かれた風景の特徴は、例えば山水画との関係といった問題にも発展するであろうが、報告者の手に余る大きなテーマである。本稿では、以上のような特徴がうかがえることを指摘しておくにとどめたい。

おわりに

本稿では、『文選』における「美」字の用法の調査結果の概要と、自然や風景を「美」と表現した例について述べた。『文選』において風景を「美」とする例はわずかに9例に過ぎず、『文選』に収められていない他の作品はどうなのか、「美」の文字を用いずに描写されている場合はどうかといった問題や、他の事物を「美」と表現することとの関わりはどうかといった問題、さらには続く隋唐の時代に至って何か変化があるのかといった問題もあるが、すべて今後の課題とさせていただく。

誠に拙い小報告ではあるが、読者諸賢から多くのご教示がいただければ幸甚である。

注

(1) 京都大学人文科学研究所、一九五七～五九

(2) <http://www.shinica.edu.tw/~tdbproj/handy1/>

(3) 例えは吉川幸次郎「森と海」『玄想』一九四七年十月。「吉川幸次郎全集」第一九巻、筑摩書房、一九六九年。石川忠久「文学に表れた海―中国と日本―」〔古田敬一編『中国文学の比較文学的研究』汲古書院、一九八六。後、『陶

淵明とその時代』研文出版、一九九四年）ほか。以下、注においては原則として敬称を省略させていただく。

(4) 例えば青木正児「支那人の自然観」（岩波講座『東洋思潮』一九三五年。『青木正児全集』第二巻所収。春秋社、一九七〇年）・小西昇「謝靈運山水詩続考——その美意識と山水画との関係」（『福岡教育大学紀要』第二七号第一分冊〔文科編〕、一九七七年。後、『漢代樂府謝靈運詩論集』葦書房、一九八三年）など。なお、山水詩と山水画の関係を単純にパラレルなものとせず、「風景詩」という新たな視点を導入して論じたものに、宇佐美文理氏の「山水画と風景詩」（『中国思想史研究』第一九号、一九九六年）がある。

(5) 平凡社、一九九六年。

(6) ただし、実際の用例は、味覚に関する表現は5例に満たない。

(7) 揚雄「劇秦美新」（巻四八）の標題の例を数に含めれば、全13例となる。次注参照。

(8) 「美新」の2例はともに揚雄の「劇秦美新」（巻四八）を指すもので、その序文で制作の経緯を述べる部分と班固の「典引」（同前）に揚雄の作品として挙げる中に1例ずつ見えるため、計2例となる。ただ、巻四八にこの作品の標題として掲げられているものも例に数えれば、計3例となる。

(9) 以下、該当する9例には便宜上①～⑨の通し番号を付け、この番号によって称することとする。

(10) 花房英樹『文選（詩騷編）三』一九七四年、集英社。

(11) 『謝康樂詩集 卷上』白帝社、一九九三年。他に陰法魯審訂『昭明文選訳注』第三冊（吉林文史出版社、一九九四年）・張啓成他訳注『文選全訳』第二冊（貴州人民出版社、一九九四年。この詩は駱礼剛氏担当）・王令樾『文選詩部探析』（国立編訳館、一九九六年）等も、ニュアンスの違いはあるが、「美」字を美しさの意で解している。

(12) 建安七子から孔融を除いた六人に曹植を加えた計七人である。

(13) 厳密にいえば、人間と全く隔絶された自然というのは、地球上のごく一部の人跡未踏の地のみであり、一般的には、たとえ深山幽谷の中であっても、例えそこに至る道が作られているなど、わずかなりとも人間の手が加えられているともいえるが、ここではそういった厳密な意味ではなく、詩の中にかくなるものとして詠じられているかという点から考えておくこととする。